

今月の 我がマチの 一番星☆



第4回知事杯日中パークゴルフ姉妹提携記念大会で挨拶する山田さん



山田 薫さん

時代の先を読み 新しいことに挑戦

「5年ごとに開催され、今年10月に北海道では初めて行われる第13回全日本ホルスタイン共進会ですが、第1回から6回まで出場しました」と振り返る山田薫さん（遠浅）は、第1回は昭和天皇や吉田首相、第3回目はご成婚間もない現在の天皇陛下ご夫妻がお見えになったと言います。

滝川市出身で、家族と共に現在地に移住し、酪農を始め最盛期には乳牛は200頭と10名ほどの実習生を受け入れていました。

昭和31年から3年間アメリカに留学し、ミルウォーキーで大ピール会社と牧場経営するドイツ人の下で働きながらウイスコンシン州立大学で酪農を学び、「地元の小学校では牛乳は無料で飲み放題でした」と滞在先でのエピソード

を回想していました。帰国後、牛舎増築や草地造成などに着手し、家畜共進会では上位入賞するなど優良牛の生産に力を注ぐ一方、昭和58年ころから木製サイロの研究調査を始めました。

自宅前にある木のサイロは町の観光スポットとなっており、自宅前には木製サイロの町を回覧して、中国との親善を推進してきた山田さんに日中姉妹提携の記念大会に毎年知事杯のカップと賞状を提供し

ます。国際文化交流にも理解のある山田さんは、中国の総領事館の要人を招きパークゴルフで親交を深めてきました。北海道は、中国との親善を推進してきた山田さんに日中姉妹提携の記念大会に毎年知事杯のカップと賞状を提供し、温厚で気さくな山田さんですが、時代の先を読む才能があり、経済発展が続く現在の中国で砂漠化が進み、植林の必要性を提唱。「新しい試みには、今後も積極的にチャレンジしていきたいですね」と笑顔で語っていました。

国際交流の原点は相互理解から

地域福祉協力員や体育指導委員としてさまざまな活動に精力的に取り組む小笠原愛子さんは、町の依頼を受けてイベントの司会を担うなど町内外に知られた人で、ご存知の方も多と思います。

「いろいろなことに関わってきましたが、国際交流事業が思い出深く、新たな発見がありました」と話す小笠原さんは「言葉の壁により、日本人は外国人と距離を置いてしまう」と日本人の閉鎖的な一面を指摘。10年ほど前に小笠原さんの家がホームステイ先に選ばれ、アメリカの高校生を受けることになり、「まったく日本語が分からない生徒に辞書は必需品でしたが、最後は身振りや手振りで意思が通じるようになりました」と体験談を語り、英会話教室や料理講習会をとおして文化交流を進めてきました。「もちろん外国から取り入れるばかりではなく、日本の伝統や習慣なども伝え友好関係を築いてきました」と付け加えます。「小中学校などで英語を教える非常勤の外国人講師が言った、international(国際) friendship(友情、友愛)という言葉が気に入っています」と小笠原さんは賞賛。「お互いを知る手段として言語も大切ですが、相手のことを理解しようとするのが

第一歩です」と話し、「国際交流の原点は相互理解ではないか」と感じるようになったと言います。

「最近ブラジルやロシアなどいろいろな国の人が安平町に来ますが、これからも温かいもてなしで迎えて行きたいですね」と町のイメージアップを目指しています。



小笠原愛子さん

国際文化交流にも理解のある山田さんは、中国の総領事館の要人を招きパークゴルフで親交を深めてきました。北海道は、中国との親善を推進してきた山田さんに日中姉妹提携の記念大会に毎年知事杯のカップと賞状を提供し



国際交流事業として料理を作る小笠原さん(写真手前)